

2～3面 「性の知識」どう教えたらいい？親たちの「困った」に答えます！／編集委員が見つけたお役立ち本／あるシニア男性の独りごと

4面 立川・この人／立川女子高校演劇部／令和3年度立川市ワーク・ライフ・バランス推進事業所紹介

No.39
12/10

2021(令和3)年
年1回発行

発行／立川市男女平等参画課
企画・編集／アイム市民編集委員
(〒190-0012)立川市曙町2-36-2
☎ 042-528-6801 FAX 042-528-6805
e-mail danjobyoudou@city.tachikawa.lg.jp

立川市ホームページ <https://www.city.tachikawa.lg.jp>



伝えていますか？正しい「性の知識」 子どもたちが幸せに生きていくために



正しい性の知識を子どもたちに伝えることは、その子が幸せに生きていくのを助けてくれます。また、性犯罪や望まぬ妊娠など、性にまつわるトラブルから子どもたちを守るよりどころともなります。そうは言っても、実際に子どもと「性」について話すのは難しいなあと感じている人も多いのではないのでしょうか？ アイムでは、このデリケートで大切な問題を取り上げてみました。



家庭で子どもたちに「性の知識」伝えていますか？

(市内の小学校PTAの方々240人が回答しました)

はい 40%

いいえ 60%

「はい」の人が答えました／ 主に何を伝えていますか？

男女の体のしくみと変化(生理・精通)……30人
プライベートゾーン※2面参照……11人
妊娠と出産……6人
すべて……3人
子どもに質問されたら話す……3人



「いいえ」の人が答えました／ 伝えていない理由は？

まだ早い、理解できる年齢ではない……27人
子どもが聞いてこない、興味がなさそう……8人
親に知識がない、伝え方が分からない……8人
チャンスがない、機会が作れない……7人
どのタイミングで話せばよいか分からない……6人
学校の授業に合わせるつもりでいる……3人
他の子と認識が異なってしまうか心配……1人

アンケートの自由記述欄から

伝えている人の中から

- まだ小さいからとあやふやに伝えず、小さい時から伝えることが大切だと思います。
- 性教育は乳児期からとても大切にするべきもののなのに、日本ではまだその考えが浸透していません。
- 親が恥ずかしがらずに伝えることが大切だと考えます。

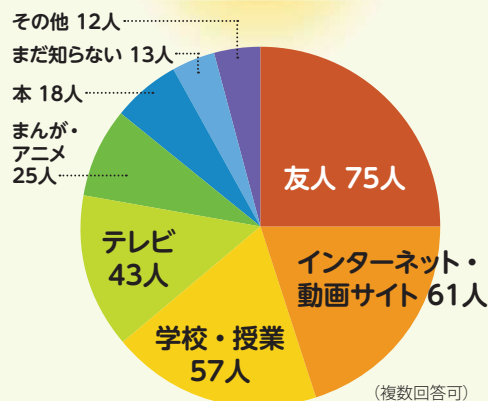
まだ伝えていない人の中から

- 聞かれた時にどう伝えたらいいか分からない。あまりハッキリ言うのもどうかと思うけど、ぼかし過ぎても伝わらなかつたら意味がないかなと思う。
- 伝え方、タイミングが分からない。
- 下手に伝えて、変なことになったら嫌なので教えていない。

アンケートの自由記述欄では、「伝えたいけど、そのタイミングや伝え方が分からない」というお悩みが多く寄せられました。

2面以降で、上手な伝え方、そして伝えることの深い意味を特集します。

全員が答えました／ 子どもは性の知識をどこで 得ていると思いますか？



「性の知識」どう教えたらい？

親たちの「困った」に答えます！

子どもに教えようと思っているのですが、「ちんちん」「おまた」と呼んでよいですか？

子どもが小さい時は「ちんちん」「おまた」でもよいですが、それらは幼児語ですから、少し大きくなったら使えません。「性器」という正しい名前も同時に教えます。「男性性器」「女性性器」と使うのはどうですか。私は自分の子どもはもちろん、講座で担当した5歳児のクラスでも「性器」で教えています。

他にも「性」には、言い換えや遠回しな表現が多いですね。例えば「月経」を「生理」と言い慣わすのもその一つです。ある中学生の教室で「女性性には『月経』があります」と話したら、「え、生理だけでも大変なのに、月経もあるんですか？」と聞いてきた生徒がいました。「生理」という言葉を日常使うのは、致し方ない面があると思いますが、正式な名称もきちんと伝えておきたいです。

子どもは親に質問してきませんが、いつ頃、教えたらいでしょうか？



質問しないからといって、興味が無いとは言えません。どのように子どもが生まれてくるのか」という疑問は、根本的なものですから、誰しも興味があつて当然です。むしろ、それを子どもが全く質問しないのなら、質問できない家の関係ではないのかと考えることも必要でしょう。その上で、「いつ」ということですが、早すぎることはありません。たとえば、お風呂場で性器の洗い方を教える、3歳ぐらいで、自分ででき

るようになります。そこで、もう親は手伝わないから、自分で洗うようにと伝えるのです。すると、性器は自分で管理するところで、こわいものや人に触れられない、また自分も誰かの性器に触れたりしないということが、自然に身につきます。

低学年の教室で、性交から出産までを教える授業を見ることがあります。その時、子どもたちは、みんな自分が「性交する側」ではなく、「生まれる側」になって、授業を聞いているのです。

「生まれる側」に立つて、性の話を聞けるのは小学校低学年までです。それ以後は「性交する側」の視点を持つように発達するという説があります。

性教育は「母親が娘に、父親が息子に」と役割分担したほうがいいでしょうか？

教えるのに性別は関係ありません。ただ、男性でも女性でも何の準備（学習）もなく、子どもに教えるのは無理ですから、まずは2、3冊本を読むなどし、正確な言葉で教えてもらいたいんですね。

「プライベートゾーン」について教えているのですが…

プライベートゾーンは、いわゆる「水着で隠れる部分で、その部分はむやみに人に触らせない」と子どもに教えている方も多いに思えます。でも、プライベートゾーンって、その部分だけでしょか。体中どこでも、触っていいかどうか、快不快かは相手との関係によるでしょう。肩に手を置かれたとき、プライベートゾーンじゃないから、我慢しなくとも勘違いする子がいるかもしれない。「プライベートゾーン」だけ教えておけば大丈夫と思うのは危険です。

性犯罪は非常に狡猾で、「たくさんキャンディを買ったから、いっしょに食べないか」といった一見、ありふれた日常的な誘いの文句から始まり、プライベートゾーンに手が伸びた時には、もう手遅れということも多いのです。さらに、もうひとつの言葉で注意しておきたいのは、「良いと言っていないのに人に触らせない」という「一人」の中に家族も含まれていることです。最近では核家族が中心ですが、我が国の核家

族はプライバシーの壁が薄く、性被害を生みやすい面があります。そのため家庭内での性虐待を意識しておく必要があります。お風呂から上がる時、脱衣所で衣服をつけて出てくるとき、家族であつておけじめのある生活が予防になります。



「赤ちゃんがどうやって生まれてきたの？」への上手な答え方は？

おかたのおとなの体の男性は精子を、女性は卵子を体の中につくります。

精子は体の奥の方に在り、精子は精巣（男の子は実感です）で作られ、ペニス（陰茎、おしっこが出る筒）の先から体の外に出ます。ペニスを臍（おしっこが出る尿道口とウンチの出る肛門）の間にある赤ちゃんの育つ子宮に通じる筒に入れて精子を卵子に届けます。精子と卵子が合体して子宮の中でうまく育つことができれば、やがて赤ちゃんになって、たいいの赤ちゃんは臍から生まれてきます。※この時余裕があれば聞く力のある子なら帝王切開や体外受精のことを話してもいいでしょう。

自慰行為はどうみればよいのでしょうか。

性に対する欲求は、脳の一番奥の方にある視床下部が働いて起きます。さまざまな要因によって視床下部は刺激され、性行動を促します。その時他の存在がなくて、自分の意志で性行動をコントロールできるのが自慰です。自律的な性行動として、カッパルになって必要です。当然子どもにとっても自然なことです。



国際セクシュアリティ教育ガイダンス

国際連合教育科学文化機関(ユネスコ)が中心となり作成した国際的な性教育の標準的指針

これまでの性教育

性に関する知識やスキル

↓

包括的性教育

人権、ジェンダー平等、多様性、幸福、健康などを包括的にカリキュラムに沿って学ぶ

世界的な指標はありますか？

国際連合教育科学文化機関(ユネスコ)が「国際セクシュアリティ教育ガイダンス(※左図参照)」を出しています。そこに書かれているのは、それぞれの人権を認め、誰もが幸せに生きることを目指す「包括的な性教育」です。

私たちの世界は、異性愛だけでなく、性に關しても、とても多様です。多様性を認め、身体を大切に、人と良い関係を築き、安心して生きられることを伝えるのが「包括的な性教育」です。ぜひ、家庭で子どもたちに、そうした性教育をしてほしいと願っています。



あだらみ 安達優雅子さん

1937年大分県大分市に生まれる。明治大学文学部日本文学専攻科卒業。電話相談員。"人間と性"教育研究協議会幹事。

編集委員が見つけたお役立ち本



「赤ちゃんはどこからくるの?」のじまなみ(著) 幻冬舎

小さなころから知っておいてほしい体と性のふしぎを、親子一緒にかわいいうイラスト・マンガで楽しく学べる一冊。



「あっ! そうなんだ性と生」(えほん) 浅井春夫、安達優雅子、北山ひと美、中野久恵、星野恵(編著)、勝部真規子(絵) エイデル研究所

子どもと一緒に読めば、親が、性の話をしなくても大丈夫です。



「これからの男の子たちへ」 太田啓子(著) 大月書店

ジェンダー問題に取り組む弁護士ママの社会のハテナにはっとさせられる。パパママに読んでほしいベストセラー。



あるシニア男性の独りごと

「享主元気で留守がいい」 久しく聞かない言葉だが、今、我が家では、この逆の現象が起きている。「妻元気で留守がいい」である。

というのは、仕事をしていた妻が、膝の手術をし、リハビリのため長期の休暇を取って、一日中家にいることになった。私は年金暮らしだから、当然、一日中妻と顔を合わせなくてはならない。今年は、金婚式を迎えたほど、妻とはけんかなどしたこともなく、夫婦円満のはずなのだが、一日中顔を突き合わせているとそうもいかない。

「コーヒーできた?」「食パン焼いて!」「洗濯した?」「ゴミ捨てた?」「食器洗って!」と、機関銃のように飛んでくる妻の言葉。

妻が仕事に行っていた時は、家事は私がほとんどしていたし、「言わなくても、やるのに」と心では思っていた。でも、こうも矢張り早に言われると、「分かっ



てるよ!」すら言えない内気な私は、「妻元気で留守がいい」と、つぶやくのが精いっぱいである。

考えてみると、私が現役で仕事をし、妻が専業主婦だったころ、妻は、「享主元気で留守がいい」と思っていたのかもしれない。

とにかく、妻には早く元気になるてもらいたい。本心からそう思っているのです。(秋)